### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	政治哲学は何を優先的に論じるべきか: 根岸毅教授の政治学方法論と民主主義論を手がかりとして
Sub Title	The Priority Issues of Political Philosophy: Developing Professor Negishi's Methodology of Political Studies and Theory of Democracy
Author	施, 光恒(Se, Teruhisa)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication	2004
year	
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and
	sociology). Vol.77, No.12 (2004. 12) ,p.99- 134
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	根岸毅教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20041228-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 政治哲学は何を優先的に論じるべきか

-根岸毅教授の政治学方法論と民主主義論を手がかりとして―

施

光

恒

「工学」型学問の構成 「理学」型学問と「工学」型学問の区分

二つの「工学」

三 学問における価値論とその社会的必要性

二 問題解決に対する学問の二つの関わり方

価値吟味の構造とその諸形態

学問的価値論の社会的必要性 価値吟味の戦略―本章のまとめ―

政治哲学の社会的必要性

政治学の位置づけ 政治哲学の社会的必要性

政治哲学は何を優先的に論しるべきか

99

かなるものかを明らかにすることである。

本稿の目的は、 社会的必要性の観点から政治哲学の役割を明確化し、 政治哲学が優先的に論じるべき主題とは

序

き国家秩序について、 伝統的に「政治哲学」の名の下に、様々な主題が様々な角度から論じられてきた。善き指導者像について、 善き政治制度について、 あるいは人間の善き生き方とその生き方を可能とする善き政

共同体のあり方について、などの主題である。 (価に政治哲学が何らかの関わりを持つことを目指す動きも存在する。 (1) 加えて、最近のいわゆる政策科学の流行の下、 そこでは、 個別的な政策の善し悪しも政 個別的政策

の価

治哲学の主題になり得ると考えられているようである。

以上、 少なくともプラトン以来の非常に長い伝統を有する学問分野であり、時代の変遷にかかわらず常に消滅すること なく存在してきた。そのことを鑑みても、政治哲学は、 究とは研究者の知的道楽ではなく何らかの社会的必要性を持つものだと理解すれば、 きであろう。 このように、 政治哲学の研究者は、 現在、 政治哲学という名の下に論じられる主題はまさに多種多様である。 自分の学問的 [関心のみに基づいて主題を設定することは好ましくない。 何らかの永続的な社会的必要性に基づくものだと捉える 研究者の資源に限界 しか Ļ 政 政治 治哲学 哲学は、 があ 0

哲学が論じる社会的必要性の高い主題とは、 人々が非常に困った事態を被ることが予想されるということを意味している。 柄に対する社会的必要性が存在するとは、 ここで用いてい る 「社会的必要性」とは曖昧な言葉であるが、本稿では次の意味で使用する。 その事柄が果たされなければ人々の生活が混乱に陥 政治哲学の研究者がそれを十分に論じなければ、 したがって本稿で探究したい 社会生活が混乱に り、 つまり、 社 会 あ 政治 般 る事

という課題を考察してい

のような考察を行う際に焦点となるのは、

くかである。

この考察の手引きとなるの

は

政

治学だけでなく、

他の

工学」

型の学問

般に

お

ij

る

価値

6

論 して

政治哲学の充たすべき社会的必要性をどのように明

方である。

すべての

「工学」

型学問はその構成上、

論理的には、

学問活動の目標となる理

想状態を設定する作

陥 か 性 0 の低 ŋ かたちで代替されるため、 主 一題とは、 般 の人々が 政治哲学がそれを十分に論じないとしても価値の吟味が他の形態を通じて行わ 好ましくない 社会一 般の人々が好ましくない 結果を被ると想定される主題である。 結果を被ることはないだろうと思わ 逆に、 政治哲学が 論 じる社 れる主 れるなど何

る。

幅 軸に展開されるものである。 点か 意図を有するもの な手がかりとしたい。 社会的役割とは何 の中で政治学の位置を確認するところに特徴がある。 を行っていくが、 々 本稿では、 ~ら間 の問 型学問として十分な役割を果たしうる政治学の構成のあり方を提示する。また、 用しつつ、 題解決活動 .題解決の意図を有する学問、 社会的必要性の観点から政治哲学が優先的に論じるべき主題とは何 幾 その際、 かを明らかにし、 (「工学」) とそうでないもの 分の私なりの考えを加えながら、 における 根岸教授の政治学方法論は、 根岸毅教授がこれまで精緻に練り上げ展開してきた政治学方法論と民主主義論 本稿では、 「やり直し」 その社会的役割に基づき、 つまり「工学」型学問の一つでなくてはならないと論じる。 根岸教授の政治学方法論や民主主義論で用いられた概念や思考方法を大 0) 価 値と、 (「理学」) に区別する。その上で、政治学は、 学問研究一般に目を配った幅広い体系的学問論を展開 「やり直し」 上記 後に論ずるように、 の課題を解明 政治哲学が優先的に論じていくべき主題とは を可能にする条件を重視する してい 根岸教授は、 く。 かを明ら つまり、 根岸教授の民主主 学問諸分野を問題解 か 政 にしようとい 社会的必要性 治哲学の担 )「再行、 うべ う試 己 の 决 を そ  $\sigma$ 

0

工学」

型の学問においてはそのような社会的必要性は認められないようである。

値

業を必要とする。

つまり

価

[値を取り扱う。

しかし様々な「工学」型の学問をみると、

型学問 る領域 「工学」型の学問においては、 えば、「工学」型学問の一つである自動車工学には、「自動車哲学」という分野はない。その一方、 [と理解できる法律学や教育学などにおいては、「法哲学」や おそらく、これらの違いは哲学的議論に対する社会的必要性の有無に由来するものであろう。 –学問活動の一部として組織だった価値論を大規模に展開する領域 学問の一部として組織だった価値論が行われることを社会は必要とするが、 「教育哲学」という名称の下、 ――を有していないものも多い。 同じ 哲学が存在 ある種 「工学」 他 0

治哲学が論じるべき主題の優先性を考察するという作業を行う。 づき政治哲学の社会的必要性はどこに求められるのかを検討する。 本稿では、 このように、 ――に対する社会的必要性がどのような場合に生じるのかを明らかにする。 まず「工学」型の学問一般を視野に入れて、 その上で、社会的必要性という観点から、 学問活動の一部としての組織だ そして、 それに基 た価

第三章では、 ある共通の諸条件の整備を目標とする「条件整備型」の に役立つ知見を提供する なる新しい二つの類型に区分できることを述べる。 いことを確認する。 たちで行う大規模な価値 本稿 と「工学」との区分について概説する。 :の具体的構成は以下のとおりである。 般に後者の その上で、「工学」型の学問を、 「個別問題解決型」の「工学」と、 論 「条件整備型」の V) わゆる哲学的研究 また、 「工学」においてのみ、 まず次の第二章の冒 すなわち、 政治学は、「工学」型の学問として構成され 人間の問題解決活動への関わり方の相 ――に対する社会的必要性が存在することを明らかにする。 「工学」との二つの類型に区分できることを示す。 問題解決活動一般を円滑に行っていくために必要で 個別的状況の下で生じる個々の具体的問題の解決 一頭では、 その学問分野の専門的研究者が組織だった 根岸教授の学問 論 違 つから 0 なけ 基 由 底 をな 来するさら ればならな 続く 理

必ずしも「哲学」と呼

n

ζj

Ō

ずれかである。

必要性の存在を確認する。 第四章では、 それを通じて、 政治学は、「条件整備型」の「工学」として理解することが妥当であり、 哲学的研究を行うことに対する社会的必要性が生じるのはどのような場合であるのか その上で、 政治哲学の担うべき社会的必要性の内容を明らかにし、 政治哲学に対する社会的 それに基づき、 を検討する。

### 問題解決に対する学問の二つの関 わり方

治哲学が優先的に論じるべき主題の種類について明確化する。

「理学」型学問と「工学」

型学問の区分

う純然たる知的好奇心に基づく問いと、"Why don't they act as they should?"(「本来これはこうあるべきな 意図を持つか否かは、 のに、なぜそうならないのか?」)という現状を不都合な状態と認識し、その改善の手立てを講じようとい になる。すなわち、"Why do they act as they do?" (「これはこうなっているが、 間 題解決の意図の有無という観点から、根岸教授は学問全体を二つの型に分ける。 その学問分野を成り立たせている基本的な問いが次のいずれに属するかを知ることで可能 なぜそうなるのか?」) ある学問研究が問題解決 、う問 0

状の改善を目指す問 ズムを利用し、 根岸教授は、 型学問 型学問 の関心は、 操作可能な変数に手を加えることにより、 前者の知的好奇心に基づく事象の説明を主眼とするタイプの学問を 題解 の関心は、 決の意図を有するタイプの学問を 事象の生起のメカニズムを特定し、その生起の原因を指摘しようとすることにある。 事象の生起のメカニズムの特定と生起の原因 不都合と認識される現状を改善しようとするところに 「工学」型学問とそれぞれ称することを提案する。 の把握にとどまらず、 「理学」 型学問 そのメカニ 後者の現

育学、法律学なども挙げられるとする。

根岸教授は 見出すことができる。 という動機に基づき研究する学問だと規定するとすれば、 た、自然科学に限らず、 ても用いることを提唱している。「理学」型学問の代表例としては、 「工学」型学問としては、 問題解決の意図の有無による学問区分の基準を自然科学に限定せずそれ以外の学問区分の基準とし 通常、 例えば、社会学を人々の行為パターンなどの社会的事象の生成メカニズムを知的好奇心 自動車工学や電子工学などの一般的に工学と称されるもののほかに、 「理学」や「工学」という呼称は、 社会学も「理学」の一つとして分類される。 自然科学分野に限って使われる傾向 物理学や天文学、生物学が挙げられる。 医学や薬学、 があるが、 他方、 ま 教

るよう期待する社会通念が存在することを明らかする。また、政治学が分担して研究に当たるべき問題(5) 学問を「工学」型に構成する必要がある場合、その学問が解決を分担すべき問題 岸教授の説明によれば、 動論的政治学への一九六〇年代以降の批判などに関する緻密な分析を通じて、政治学に対し に論じたうえで、「政治」という言葉の用語法、 手に決めてよいことではなく、社会の要請にしたがって定められなければならないとする。 決を志向する学問であることが期待されているか否かの観点から決められなければならないとする。 学」と「工学」 ればならない。 根岸教授は、 の範囲は、 型学問として構成される必要があると理解することができる。 「国家およびそれに関連するもの」をめぐって生じる不都合であると論じている。(6) のいずれのかたちをとるかは、研究者の好みや都合ではなく、社会の要請によって定められ 政治学は、「工学」の一つでなければならないと主張する。 つまり、 政治学は、「国家およびそれに関連するもの」をめぐって生じる不都合の解決を目指。 ある学問に対して、社会一般の人々から「工学」の期待があるかどうか、つまり 日常の政治論議のあり方、伝統的な政治学の構成、 根岸教授によれば、 (不都合)の範囲も研究者 根岸教授はこのよう 工学」 ある学 すなわ また、 の形態をと į, わゆる行 問 問 (不都 1が勝 ある 題解 理 根

### □ 「工学」型の学問の構成

確定し、

それを実現するための手立てを知らなければならない。

n **、る別の状態を生起させることである。この作業を実行に移すためには、** 般に、 工学 型学問 の目 指 す ,問題解 決の活動 かとは、 不都合と評価 され その別っ る状態を除去し、 の状態 自 的 好 まし  $\Box$ 標 ίs と評 理 想 価 を さ

ことに役立つような法則に関する知識である。 のである。 態と目標となる理想状態とを、 の実現のための手立てを案出する局面である。ここで入手を目指される法則的知識とは、不都合と評価される状 た理想状態を実現するために、 る価値論を行う局面である。 る研究を行う局面からなる。 と、設定された理想状態を実現するために必要な法則的知識を入手し、 を目指 「工学」型の学問 したがって、「工学」の研究、 す その 局 つまり、 面 理 想状態を実現するため 事 は、 実分析の局面 説明変数を操作することによって、不都合な状態を、 このように、 この局面は、一般的に「哲学」と称される局面であると言える。 (8) 前者は、 ともに被説明変数が異なる値をとったものとして記述することができるようなも 適切な法則的知識を入手し、その妥当性を吟味し、 つまり問題解決の意図を有する学問研究は、 価 の法則 目標となる理想状態を設定し、その状態がなぜ理想的であるのかを吟味す とが結びつき、 |値論を行 的 こちらの局 知識の ζ, 構成されている。 入手、 目標となる理想状態を設定する局 面 は およびそれを用いて理想状態の実現の手立ての考案 事実分析の局面であるということができよう。 その理想状態を実現する手立てを考察す 目標とされる理想状態へと変化させる 目標設定のため その上でそれを用 面 後者は、 の議論を行う局 哲学 設定され 理想状態 0 局 面 面

積であると捉えることができる。

### 三 二つの「工学」

1

I 題解

決の図式

人々の生活の中で行われる日々の問題解決活動をより円滑なものとするために生じ、発展してきた知的 根岸教授は次のように記している。「生きるということは問題解決の積み重ねである」。「工学」型の学問 活 動 0) は 集

宜 間を含めた生物は、 Ę 人生を問題解決の連続として捉える根岸教授の見方は、 問題解決活動 すべて絶えざる問題解決活動に従事していると捉えた。ここで本稿の議論を進める上での(ロン) の過程を表現するポパ ーがしばしば用いてきた図式に言及したい。(3) カール ・ ポ パーと非常に類似してい . る。 ポ パ 1 ŧ 人 便

た 物 ての問 は の環境 有限であるゆえ、 ポ ٠, 、しは、 .題解決の主体は共通の試行錯誤的過程を辿らざるを得ないと論じ、 への適応とい 科学理論上の問題の解決のような人間の高次の精神的能力を用いた問題解決活動も、 主体は問題状況に関する知識を当初は十分には持っていない。 う間 題解 決 の活動も、 その論理構造は、 同一であると考えた。 その過程を表現する次の図式を提示 認識能力の有限性から、 問題 解 決の主体の認 より下等な 識 すべ 能 動 力

(問題) ·TTn (暫定的解決)  $\rightarrow$  EEn (誤りの排除・修正) Pn+1 (新たな問題)

それらに関連する誤りを排除していく。 うな理論 の図式の意味するところによれば、 (暫定的解決)を盲目的に幾つか提起する。そして、 それによって、当初とは異なる新しい問題状況へと移行していく。(エト) 問題解決の主体は問題状況において、 それらの諸理論を何らかのかたちで吟味・検討し、 その問題を解決すると思われるよ

るとみなし得る。 人間の生活とは、 問題解決の意図を持つ学問である「工学」 ポパーの右記の図式で模式的に示される絶えざる試行錯誤の過程を通じた問題解決活動 型の諸学問の目的は、 生活の様々な問題解決活動 であ 0)

このように、

ある個別的状況の中で生じる具体的問題 Pt の円滑な解決に有用な法則的知識を入手し、

る。

円滑 な展開 のため に有用な知見を与え、 人間 .生活の改善に貢献することであるということができる。

2 問題解決活動に対する学問の二つの関わり方

学問的 元対する関 ベ 価 値 論 工 わり方は、 学 すなわち哲学的議論 型の学問は、 論理的には二つの相異なるかたちが考えられる。 人々の の社会的必要性とは何 首 マの )問題解: 決活動を円滑化するためのものであるが、 かを明らかにするという本稿の課題を達成するため、 この区別 は 根岸教授は行ってい その 蕳 解 決活

その準備作業として私がはじめて導入する区分である。 型学問 の関わり方は、 ① 個 別 約 的状況の下で生じる具体的

間

題の

解

決

効率的なものにするというものである。 問題解決活動に対する「工学」型学問の一つめの問

れば、 案することによって、 それを利用した解決の手立てを考案するという関わり方である。 >ことによって、その問題 Pt から他の新しい問題 Pt+1 への移行を援助する役割であるということができある時点における問題 Pt の解決のために役立つ体系的な法則的知識を与え、それを利用した手立てを考 は 各個人が様々な場面で直 面する個別的 問題解決 0 ため ポバ の効率のよい手段となる法 1 の問題解決図式を用い 崱 て抽象的に表現す 韵 知 識 を入手し、

知見 体的 事を効率化するためにはどうすればよいか」、 この場合の解決を目指される 個 が それゆえ、 別的な問題である。 後者には音響学の知見 その時点で当人によって認識された個別的状況の上に成り立っているものである。 前者の問題については、 が、 「問題」 効率の とは、 良 63 あるいは 問題解決に少なくとも何ら 人々が日々生活を営む様々な個別的状況の中で直面するものであ 例えば、 「よい音で音楽を聴くにはどうすればよい 家庭電器製品の製造の基礎となっている電子工 か 0 かたちで役に立つであろう。 か」などの 例えば、「家 Ď 具

それ

を

う。 を果たす社会的必要性から生じてきた学問 もう一つは、 コンピュー と称することにする。 ②問題解決活動一 タ工学、 自動車工学、 一般的に、 般の円滑な遂行を可能にするための条件を整備するという関わり方である。 電子工学、 次のような「工学」 「個別問題解決型」 美容整形医学、音響学、建築学、 型の諸学問 の「工学」 は、 ――であると捉えることができよ それぞれの領域で、 食品工学などの諸学問である。 この 種 一の役割

利用した解決の手立てを提示するという役割を果たす諸々の

工学

型の学問のことを

「個別問

題

決型」

接的に役立つことはないが、 異なる問題を有しているとしても、 社会に住んでいること」などの諸条件が必要である。これらの諸条件すべては、人々の個別 となる。 をすればよいか」 |研究活動の自由 を行うためには幾つかの条件が共通して必要となるであろう。 々がある時点で直 例えば、 が保証された社会に住んでいること」、「私有財産権が認められ、 「肉体的、精神的に健康であること」、「一定の論理的思考や基本的な読み書きができること」、 という問題を有しており、 面している個別的問題がどのようなものであったとしても、 いずれの問題解決活動を行おうとするときにも不可欠である。 いずれの人が問題解決活動を行っていく際にも、一連の条件が共通して必要 他のある人は「よい音で音楽を聴くにはどうすればよいか」とい 例えば、ある人は 自由な経済活 問題解決 「家事を効率化するには 的 の活 な問 動 動 題 が 徐保証 の解決に直 (試行錯誤 された ぅ 何

にし、 もの どのようなものであっても、 たな問題) 上で言及したポパーの問題解決の図式を援用して示せば、 が 問題解決活動 存在する。 →…」という問題解決活動一 そして、 に間接的に貢献するという知的活動の関わり方も存在する。 その共通条件を整え、 「…→ Pn (問題) 般に共通する試行錯誤の過程を円滑に展開するために必要な条件という  $\rightarrow$  TTn 維持することによって、 (暫定的解決) 次のように言えるであろう。  $\rightarrow$  EEn 問題解決活動一般 (誤りの排除 ある個 の円滑な遂行を可能 修 Œ 莂 的 Pn+1間 題 Pt が

のような問題解決活

動一般に共通する一連の共通条件の内容を明らかにし、

それ

が整備された状態を作り出

心理学、教育学、法律学などの「工学」型諸学問は一般にこれに含まれよう。このように、これらの諸条件の整備の社会的必要性に基づき生じてきた「工学」型の学問もある。例えば 備なしには、 に直接的には役立たないが、 型の学問を「条件整備型」 維持することに役立つ法則的知識を提供することに対する社会的必要性も存在する。 いずれの問題解決活動も行っていくことが非常に困難、あるいは不可能になるからである。 問題解決活動一般を円滑に行っていくための共通条件の整備 0) 「工学」と称することにする。 例えば、 このような諸条件の整 個別的な問 と維持を目 医学、 指 題 ゆえに の解決 す

## 学問における価値論とその社会的必要性

ず、 二つのタイプの「工学」― この章の目的は、 行論の都合上、 学問における価値論、 節で、 価値を吟味する活動一 「個別問題解決型」 つまり哲学に対する社会的必要性のあり様を検討することである。 と「条件整備型」 般の構造について言及する。 ――それぞれにおける学問的価 次の第二節では、 値 前章で挙げ 論の社会的

### (--)価値吟味の構造とその諸形態

必要性の有無について考察していく。

1 価 値 吟味 般に「主体の欲求を満たす客体の属性」として定義される。(ミメ) Ó 構造

価

値とは、

ことは 認識の要素を含み、 ある対象 (物や状態) 主体の有している事実認識と決して無関係ではない。 が、 そのような属性を有していると判断することである。 心理学の有力な理論 その意味で価 *(*) つは、 値 判断 「個人

したがって、

価値判断を下すとい

う

ば、 行動はすべて、 ても決して例外ではない。 当然、 周りの様々な状況についての事実認識の上に成立している。 その人の価 当人の有している主観的認識の関数である」と述べる。(空) !値判断も変化すると考えるのが妥当だと言えるであろう。 <sup>(21)</sup> ある物や状態は価値がある、 という判断は、 したがって、 このことは、 その対象についてや、 ある人の事実認識が変化すれ 価値判断とい 自己の いう行 求 動 0) に

とは、 断 に関する事実認識を検討することによって、 の合理性も考慮に入れることが可能となる。ここにいわゆる価 !値判断と認識のあり方が関連を持つことが認められれば、 ある価値判断の基礎にある、 対象物や関連する人々の欲求のあり方やそれらを取り巻く周囲 その判断の妥当性を問うことに他ならない。 事実認識の合理性が問題となるのと同様、 !値の吟味を行う意味が現れてくる。 0 様 価 々な状況 値 0) 価 岭 値

しい問題) 様の形で表すことができる。 る方が、 価 |値判断は事実認識に不可避に基づくものである以上、 適切な価値判断であると言える。  $f \longrightarrow Pn$ (問題)→ TTn 事実認識の吟味過程は、 (暫定的理論) ある価値判断は、 ポパーによれば、 1 EEn (誤りの 吟味・改善された認識に基づい 上記 排除 の問 修 題解決 Ē の図式と同 て

n→認識の拡大→価値判断 n+1→…」という形で表されよう。「価値の吟味」とは、 るためには、 を他者と議論するという行為は、 行為であると考えることができる。 ている事実認識 し合うことを通じて行われてい たがって、 判断 価値判断をより妥当なものにしていこうとする試みは、 の検討を行い、 [の基礎になる事実認識の絶えざる批判的検討を通じた価値の吟味が必要なのである。 事実認識の吟味・改善を通じて、 . る。 実際のところ、 実生活における価値の吟味のあり方を考えてみても、 価値判断をドグマティックなものではなく、 お互 l, () 価値判断を成り立たせている事実認識 価 |値判断をより適切なものにしていこうとする この図式を利用すれば、 より妥当かつ合理的なものとす ある価値判断 ある価値 0) 値判断 の基 妥当性 一礎となっ 0) 価 の適切性 値 判 断

ことができると言える。

2 価値吟味の諸形態

実際にその認識に基づいて何らかの行動を実際に行い、 事 実認識の批判 ①思考実験 的 (単 吟味を行うには、 独の個人の思索、 幾つかの異なる方法がある。 あるい は複数の個人間での議論)、 その行動の結果得られる諸事実によって今までの 少なくとも次の三つの異なる形態 ②統制され た環境・ 内での実験室実 がが 挙げら 認識 (3) n

吟味するという方法

(実践的試行錯誤)、

の三形

態である。

判的 法を通じたものもあると考えることができる。 ることは自然であろう。 価 値 1吟味を通じて行われることを念頭に置け |判断の妥当性をめぐって行われる議論は、 つまり、 価値吟味も、 ば 通常社会科学で考慮される①だけでなく、 価 実際のところ、 値 の吟 味も、 このような三つの形態を経て行 価値 判断に関係する諸認識 2 の妥当 (3) (7) わ 形 n 性 態 ると想定 関 0 岒 する批 +

これ 方としては る電器製品を購入する際、 しては、 の実験、 されるであろう。 い分けている。 我々は、 7 0) らの形態を通じた吟味を行ったとしても、 人々の 多くの場合、 例えば動物実験などを通じて、 通常、 間で同 可 例えば、 能であれば しかし、 問題となっている課題の性質と吟味方法の特性の相性という角度から、 ③の実践的 0) 薬学において、 結論が下されるとは限らない 両 たいていの場合、 A社製のものを買うかB社製のものが良い 社製 0 試行錯誤を通じた価 ものを一 検討が行われるはずである。 ある医薬品の良し悪しを検討する際には、 定期間 思考実験的な議論のみでは埒が 完全に満足の 借り、 が、 値 。 の 吟味 試用 単なる思考実験のみよりは、 行く結論が出せるわけではない Ų が頻繁に行わ その結果を踏まえて判断を行うことである。 また、 か吟味するとき、 より日常的な場面での あ れるだろう。 かな もちろん研究者間で議論 ζ, ので、 最も効率の はるかに深い 例 これらの吟 į 統制され えば、 問題に関 良い吟味の仕 価 ある家庭であ た環境 味方法 検討を行う 値 判断 わるす を使 角 がな に 関 で

6

か

本稿では、

1

②を通じた価

値

の検討を

「学問的価値論」と、

③を通じたものを「実践的試行錯誤を通じた価

値の吟味」と称することにする これら二つの形態を通じた価 値 の吟味は、 異なる幾つかの特徴を有する。 それぞれについて、 長所と短所を明

行うことができると言える。 事柄についても考慮できるようになるということが挙げられる。 短 れられなかった様々な事柄 時 まず、後者の実践的試行錯誤を通じた価値吟味の長所である。 的 にするというかたちで検討すれば、 間で下すことができるということも挙げられよう。 価値論と比べて多くの関連する事柄・ 事 情の存在を明らかにすることができ、机上の学問的 以下のような事柄を指摘できよう。 事情を考慮に入れることができ、 一般的に述べて、 また、そのため、 これを通じた価値 実践的試行錯誤を通じた価 複雑な問題について円滑に吟味 ある程度妥当な判断を比較 価 の吟味は、 値 論では捉えが 事前には考慮 値 たい 一の吟味 複雑 に入 的

践的試行錯誤を通じた吟味とは逆に、 を用いた調査を行った場合、 かない致命的な事態を招く恐れがあるということである。 次に、 学問 実践的試行錯誤を通じた価値 的 価 値 論 つまり思考実験や実験室実験を通じた価値論に関してである。これの長所としては、 その被験者の健康を著しく害してしまうというような恐れである。 価値判断の吟味を行う試行錯誤活動に の吟味は、 深刻な短所も有している。 例えば、 ある医薬品の良し悪しを吟味するため被験 それは、 おいて、 ある試行がやり直 ある試行が、 やり しのきか 実

ò ない複雑な主題については妥当な判断を下しにくいということが挙げられるだろう。 反対に短所としては、 議論の際に考慮に入れられる変数の数が限られており、 多くの事情を考慮しなけ n ば な

しまり、

簡潔に述べれば、

以下のようになるだろう。

学問的価値論と実践的試行錯誤を通じた価値

の吟味との

ない致命的な事態を招くことがほとんどないということが挙げられよう。

112

これらの

「工学」

においては、

研究者が価

値論を行ったとしても、それは適当なところで打ち切られ、

社

会に

0

反応を待

ち

行 両 がやり 者では、 しの 般 きかない致命的な事態を招く危険性を有するという重大な欠点も持つ。 的 に実践的試行錯誤を通じた価 値 0 吟味 Ó 方 が優 12 てい る。 L か į 実践 的試 行錯誤 は

あ

る試

### (=)学問 的 価 値 論 の社会的必要性

1

個

莂

問

題

解

决

型

゙゙゙゙゙゙

かし、 動 活 だった大規模なものでは のことは明らかと言えよう。これらの「工学」においては、 は 勤 コ 行 の ンピュータ工学や自動車工学や電子工学などの個別問題解決型の「工学」では、 それは、 われない。 部として組織だった形で価値についての研究を行うことはない。 研究活動の一部としての価値論を形成するほど、 「コンピュータ哲学」、「自動車哲学」、「電器製品哲学」などの言葉が奇妙であることからもこ ない。 研究者が、 つまり哲学として一般にみなされるほど、 価値論を全く行わないわけでは つまり通常 通常、 「哲学」 専門的 と称される研究活

ける 研究者間 おける実践的な試行錯誤の結果を待つというかたちがとられるのが普通である。例えば、コンピュータ工学に 「よきコンピュータとは何 の議論は、 その後それを受けて、再び改良した製品を作るという過程をたどる。(マロ) 適当なところで中断される。その代わり、実際に製品を製造し、それを市場に出し、 かし、 あるいは自動車工学における「よき自動車とは何 かし ということに関する īfī か お

価 を通じた価 値 こ の 一 論を行う局 連の過程は、 値 の吟 面と、 味 に任せてい 価値 そこで明らかになった理想状態の実現に有用な事実分析を中心とする局面とからなる。 .の吟味を研究者間の学問的な議論で行うのではなく、社会における実践的 ると見ることができる。 先に指摘したとおり、 「工学」 型  $\overline{\mathcal{O}}$ 学問 は 論 理 的 誤

織だっ れるのである。 わ か n į な た価値論を必要としていないということを表していると考えられる。 個 別問 価 値 題解決型の この事情は、 の吟味は、 「工学」においては、 専門家ではない、 社会は、 個別問題解決型の諸々の「工学」においては、 社会における一 研究活動の一部として組織だったかたちでの学問的な価 般的な個々の人々の実践的な試行錯誤を通じて行 研究活動の一部としての組 値 論 は

n れ る非常に複雑な刻々と変化する多くの諸事実に依存している。 な なければならない事柄は多様で、非常に多い。 個別問題解決型の 別問題解決型の ĹĴ 事情に関して、 「工学」において、専門的研究者による学問活動の一部としての価値論が社会的に必要とさ 「工学」において設定される理想状態は、 以下のような説明を与えることができるであろう。 ある状態についてその良し悪しを判断する際に考察すべき事柄 ある状態を「よい」 問題解決の主体が置かれている個別的状況に関 と判断するために、

は

イエクの用語法を援用して述べれば、

ローカルな状況に依存しており、

考慮に入れるべき変数の数が莫大

であるという意味で、

非常に高度の複雑性を有するものなのである。 (3)

ない。 使うのか、 こかなどの無数 すためには、言うまでもなく、 、えば、「よきコンピュータとは何か」というコンピュータ工学における理想状態についての問 使用者のコンピュー 0) の個別的 な事情に触れなけれ 非常に多くの個別的状況に関する知識を必要とする。 タの知識はどの程度か、 ば、 「よきコンピュータとは何か」 色や形についての好みはいかなるものか、 という問 使用者はどのような目的で いに答えることはでき 使用場所 ζ, に解 答を出 はど

ゆえに、 、る複雑な諸々の 別問 抽象的で原理原則的な学問的 題解決型の 事柄を考慮に入れ、 「工学」 の関わる理想状態とは、このように個別的で複雑な事情に依存する性格を有するが 何らか な価値論になじまないのである。 の説得力を有する判断を机上で下すことの不可能性は明らかである。 人間の認識能力の限界を認め n

ИD つ (まり、 (えに、 社会一 個 莂 的 般 『状況における自分たちの実践的試行錯誤を通じて、 の人々は、 学問 的 な価 値 :の議論を必要とせず、 は 関連するロ るか に効率的な手段を用 ] カルな知識を漸次的 ιj て価 値 に吟味 を行う。

各人にとって Ó 連 想状態を徐々に特定していこうとするのである。

ŋ は 様なコンピュー してくれるよう求める要請はない とそれを運用 個 タ工学の例で言えば、 コンピュータ工学の専門的研究者にそれを組織だったかたちで大規模に論じてもらい、 !々の主体が、 般の人々が個 した活 ・夕の製作 実際に何台かのコンピュータを購入し利用することを通じて、 動 |別問題解決型の を通じて、 の活動を行うことなのである。「よきコンピュータとは何 望まれるのは、 間 -題解決活動を効率的なものにすることが大部分なのである。 工学 コンピュータを作るための法則的知識の提供とそれを用いて実際に多 に対して望むことは、 問題解決のために必要な手段的 かし 徐々に明確にしていくの という 権威ある判断を提供 間 Ļλ つまり、 に対 す る解答 コンピ 0 いであ )提供

あり、 か二重 は、 論を展開しても、 しまり、 社会的に必要とされてい 社会的にそうした価 一瞼がよい 個別問 かなど顔の美しさについ 電子工学者がよき家電製品について論じても、 [題解決型の「工学」においては、 値 ない。 の判断はほとんど求められていないのである。 例えば、 て議論しても、 コンピュータ工学者がよきコンピュー 大規模な組織だったかたちの学問的な価 権威ある説得力を有する判断を下すことはできな また、美容整形医学の専門家が、 タについて机上で大規模な議 値論、 重 なわち哲学 瞼 が良 į, ので

型の 2 「工学」 条件整備型の 問 題 に 解 決活動 お ίj 7 工学 は事 般の円滑な遂行を可能にするための条件の整備を目指す 情 は異 なる。 条件整備型の 工学」 では、 価値

実験室実験を通じたかたちで行われることが社会的に必要とされている。

の吟 例 えば、

味 は

学問

的に、

まり

忠考 条件

医学においては肉体

;的健康

「工学」、

すなわち、

整

の結果として提出される判断

が

何らかの権威を持つ優れたものであると一般に考えられてい

教育哲学」、「法哲学」という名称の下に学問的な価値論が伝統的に行われてきている。また、

学問;

的

な

状態について、 れを通じた価値の吟味が行われるため、「哲学」という名称が通常用いられ かたちで学問の一部として考察を行っている。 教育学においては成熟した人間像について、 薬学においては薬品の良し悪しについて、 医学や薬学では、おそらく、 法学においては公正さや正義について、 臨床心理学や精神医学においては精神的 ない(26) (ないが、 様々な実験室実験が広く行われ、 教育学や法学に関 研究者が な 健 織 がだっ 康 ĸ そ た 0

的 育児について不安を抱く親は、 確化してもらうことを要請する。 な思考実験や厳しい 条件整備型の「工学」においては、 相 置 批判、 臨床心理学者や教育学者の知見を参照しようとするだろう。 あるい 例えば、 社会一般の人々は、 は統制的環境内での実験室実験を通じて、 血圧や血糖値の理想的な値について人々は医者に尋ねるであろうし、 自分たちの実践的な試行錯誤を通じてではなく、 研究者に理想状態を発見し、 学問

のような説明を与えることが可能である。 条件整備型の「工学」 においては、 学問的な価値論を展開する社会的必要性があるという事情に関しては

能 程を進めるため 展開を可能にする条件であるがゆえに、この条件の内容自体を実践的試行錯誤を通じて探究していくことが にしてしまうというやり直しのきかない致命的な事態をもたらす大きな危険性をはらんでい たものであっ あるいは非常に困難だからである。 第一に、 自分 た場合、 の理想的 の一連の条件自体を実生活の中での実践的試行錯誤を通じて模索していくことは、 条件整備型の な血 試行錯誤を可能にする条件自体の破壊を招き、 圧 の高さを知りたいからといって、 「工学」における研究活動の目標となる理想状態は、 問題解決活動一般の円滑な展開を可能にする条件、 薬などで自己の血 その後のすべての試行錯誤活 圧の値を様々に操作 問 題解決活動一 つまり試行錯誤 ある試行 動を不 般 した上で 0 闸 可 が 的 朩 滑 誤 過 可

問

題につい

個

々の人々は個別的

|状況の中での実践から得られる経験を通じて目標を設定することになる。

が

眼

の機能

Ţ

0

ま

ŋ

腿

0

状態に

関す

、る判断

に関

文化的

状況や時

代状

況を考慮する必要

とんどなく、

考察すべき事

柄

事

情 健

この数に無状

記

は

るかに少ない。

そのため、

実践的な試

行錯誤によらずとも、

あ

能 日常生活を送ってみることにより、 にし 実 前 な模索の行為自体 加えてその 後  $\sigma$ すべての が、 健康とい 問題解 理 種的 決活 う、 な値を実践的に模索するなどということは行 勤 問 の遂行を行 題解決活 動 15 得なくする危険 般の肉体的条件を破壊し、 性 が あるか 試行の誤 らであ わ 12 な 6.7 r)  $\mathcal{O}$ なぜなら、 正を不 そ

通じた机上の学問 こうしたやり直 的 l のきかない 価 値 論 の大規模な展開を社会は必要とすると捉えることができる。 致命的な実践的試行を回避するために、 その危険性 0) ない 思考実験 P 桘 耳

導 えに、 柄 個 る程度説得力を有する判断を下すことが可 き出されるも 莂 的 学問: 事 情 実に比 の数は少 的 条件整備 較的 原 のが多く、 んない。 理 原則的 依存 型 0) その意味で、 してい 工学」 な机上の価値 個別的状況に ない。 の実現目標である問題解決活動一 間 間 題 あ 題 論になじみや 能である。 解 まり左右され 解 決活 決活 動 動 す 般 般 ない。 U 0) 0) 可 という性格を有しており、 可 能条件に関する主題は比較 能条件は、 したがって、 般の可能条件は、 人間 理想状態を考える際に考慮 0 能力の 学問 生 社会状況、 物学的 的 的 単 純 価 なも 限 値 界 論を通じて、 ので か 6 状 すべき事 況 理 あ W に

慮 何ら権威ある意見を述べることはできない。 かなるものか、 例えば、 てある程度でも説得 に入れるべき事柄 美容整形医学の専門医は、 周囲 の人々の好みはどのようなものか、 方の 事情の数が非常に多い あ る判断を下すことができず、 眼の機能に関する事柄と無関係に、 からである。 どのような眼の外観が良い などの無数の事柄を考慮に入れ 机 文化的にどのような眼 Ľ 0) 価 値 論 はまさに空論 かという主題について論じる際 美容上 が好 の眼の容姿の良し悪し ま に終 なけれ n わ る か、 る ば 現 したがって、 その 在  $\bar{o}$ 主 流 に には、 戸題に 行 i j は 考 7 13

価

値

吟

味

0

あり方に関する本章の以上までの議論をまとめ

ń ば

次のようになる。

度、 妥当性のある判断が下 せるといえる。

### (三) 価 [値吟味 ゟ 戦略— -本章の まとめ

この 想状態は、 味によってより明確な形で吟味されることが可能だからである。 に依存している。 個別問題解決型」 「工学」 性格上、 0) )取り扱う個別具体的な問題解 したがって、 問題解決の主体がおかれている個別的状況の下で非常に複雑 0) 「工学」においては、 Ų かなる机上の学問的な価 決の際の目標となる理想状態は、 学問的な価値論は社会的にほとんど必要とされない。 値 論も、 また、この種の 関連する諸事実のごく一 実践的試行錯誤を通じた価 な刻々と変化する多くの諸 「工学」 において設定され 部しか考慮に入れ なぜなら、 値 る理 の吟 事 実

件整備型の この主題に関する実践的試行の誤りは、 ある。 5 能条件の破壊により、 お ことができないために、 、ることができると考えられるからである(%) 由 いて設定が目指される理想状態は、 他方、 原 来するものとみることができ、 避的 実践的試行錯誤を通じた価値吟味によって、 後者の 「工学」が実現を目指す ルでは、 「条件整備型」 その後 机上で行われる学問 説得力のある判断を下し得 0 0) 他  $\tilde{o}$ 「工学」では、 比較的 主題、 1,1 人々の問題解決活動 かなる問題解決活動も行い得なくなる危険性があるからである。 やり直しを行うことが非常に困難だからである。 個 つまり、 別的 的 な価 学問的な価値論が社会的に必要とされる。 状 この理想状態を明確化していくことはできない。 況に依存 問題解決活動 ない 値論によってもある程度説得力を有する理想状態の像を提出 (試行錯誤活動) こしない 相対的 般の可能条件は、 に単純な事 般の 可能条件の整備さ 柄であ 人間の能力の一 問題解決活 この種 る Ø えに、 0) 般的 れた状態 動 なぜなら 「工学」 ま 限界 般の た /なく に 条 П て か

このような事情 Eから、 条件整備型の ī 学 にお ĹĴ いてのみ、 学問的な価 値論に対する社会的必要性 0) 崩 確

な存

在を認めることができると言える。

### 四 政治哲学の社会的必要性

政治哲学の社会的必要性のあり様を明確化にすることである。 H る学問的な価値論 この章の目的は、 政治学は、 つまり政治哲学における議論すべき主題の優先性を明らかにすることである。 条件整備型の「工学」として理解することが妥当であることを指摘し、 また、その社会的必要性に基づいて、 政治学にお その上で、

### 政治学の位置づけ

政治学は、

個別問題解決型の「工学」ではなく、

先に確認したように、政治学とは、「国家をめぐって発生する問題 (不都合) をその分担の範囲とする 個 0

条件整備型の「工学」として理解すべきである。

問題解決の学問(「工学」)」として規定できる。

て考察し、 含まれる。 問 題解決活動 その実現のための手立ての解明を目的とする「工学」型の学問の存在を社会は必要とするはずである。 問題解決活動一般の条件の理想的な整備を行うためには、その条件を備えた国家秩序のあり方につい 般の円滑な遂行を可能にする一連の条件の中には、 国家秩序のあり方に関連する事 柄 が 数多く

0 政治学は、 誘致やごみ処理場の運営など問題解決の一般的条件とはあまり密接な関係はないが、 政治学を個別問題解決型の 主にこの必要性から生まれてきた条件整備型の「工学」型学問であると考えることができる。 「工学」として捉えることも不可能ではないかも知れない。 現実として国家が関わ 例えば、 オリンピック

てい て政治学を捉えられないわけではない る問題も存在する。 したがってたしかに、このような諸問題の解決を目指す個別問題解決型の「工学」とし

題解 学」として構成すべきだという要求よりも、 決活動 の円滑な展開を可能にする条件が適切に整えられた国家秩序を形成しない限り、実際上、 かし、個別問題解決型の「工学」として政治学を構成すべきだという社会的な要求は、 は行い えない。 そのため、 政治学の名の下には、 はるかに小さいと考えるのが妥当である。 そのような国家秩序の整備を目指す学問的努力に対 なぜなら、 条件整備 他のほとんどの問 問題解決活動 型 の 云

する社会的必要性の方が、 治学は (より厳密には 「政治学」 の名の下に行われている学問活動の大部分は)、 一般的に、 条件整備

### 政治哲学の社会的必要性

学を捉えた場合には、 的 に対してもそうした学問 工学や自動車工学、 [価値 これまでの議論を踏まえれば、 論 政治哲学 美容整形医学に組織だった大規模な学問的価値 政治哲学の存在に対する社会的必要性はほとんど考えられない。 的 価値論は求められていないと考えることが妥当である。 を社会は強く必要とすると言うことができる。 論が求められ 個別問題解決型の ない 0) この場合、 と同様の意味で、 「工学」として政治 コンピュータ 政治学

な国家秩序のあり方と、

その国家秩序を生みだし、

維持することのできるような装置としての国家

(政府

の制

いえに、

学」として構成される必要があると考えて差し支えないであろう。 能条件を探求すること、 社会的必要性 すなわち、 からみて、 はるかに多く存在していると考えることが自然だからである。(3) 政治学を条件整備型の 「人々の問題解決活動 政治哲学のなすべき役割とは、 「工学」として捉えた場合にのみ、 (試行錯誤的活動) 国家に関連する場 般が最大限円滑に行 面 で問 政治学における学問 題 解決活 わ 12 動 型 得るよう の 般 0) 云

分野こそ、

ź

度 主 一の造りとはたらきとは ίJ かなるも Ō かし という主題を吟味 検 (討することだと考えられ

また、 えた理想的国家秩序を模索していく方法として、 り直しを行うということも非常に困難である。 家秩序を破壊してしまい、 この主題について実践的な試行錯誤を通じた探求を行うことは、 のような社会的必要性 問題解 決活 勤 般 を円滑に行 その後のあらゆる問題解決活動の実行を不可能にしてしまうという危険性を有する。 が生じる理由 ってい は くのに最適な国家秩序を一 右記の主題は、 よって、 実践的試行錯誤はふさわしくない(30) 問題解決活動一 実践的試行錯誤を通じた模索になじまない 度破壊してしまえば、 問題解決活動 般を遂行していく上での最適な条件 般 0) 可 それ 能条件を整備 を 同 復させ、 か らであ た国 45

莫大な数の人命が失われ、 っていくために不可欠な条件を破壊してしまうという帰結を招いた。 望ましくない実践的試行錯誤を行ってしまった例としては、 「社会主義の実験」 は、 今なお解決しがたい混乱状態が続いている。 私有財産権の枠組みや市場経済制 度とい 前世紀 この う、  $\bar{o}$ 「社会主義の実験」 人々が試行錯 誤 つ た試 4 の結果、 誤 的な が挙げ 問 旧 題 社会主義国では Ś 解 決 n れるで 活 動 を行

家秩序 担う学問 n 0 はどのようなもの ば か それゆえ、「人々の問題解決活動 ならな 像 とい につ う主 Ų. て明 思考実験や批判的議論など知的 題につい か、 確 64 またその秩序を形成し、 わゆ 化され いては、 る必 「政治哲学」 少なくとも原理 要性がある。 般の円滑な展開を可能にするような条件を適切 であると考えることができる。 維持するのにふさわしい政府の造りとはたらきとはどのようなも 的 この必要性 「シミュ なレ ベ 、ルでは、 レ に応え、 ーショ 机 上 ン その知的 一の学問 活動によって探求活 :活動 的 な価値論を通じて明ら で専門として行う社会的役割 に備えた理 動が 行 趚的 わ n かに 玉 理 家秩序と 想 なけ 的  $\mathbf{F}$ 

### (三) 政治哲学は何を優先的に論じるべきか

秩序を形成し、 「人々の問題解決活動 節 までの議論で、 維持するために必要な装置としての国家 (試行錯誤活動) 政治哲学が充たすべき社会的必要性 一般の円滑な遂行を可能にするための条件を備えた国家秩序、 (政府) 0 内容が明らかになった。 の制度上の造りとそのはたらきについて、 つまり、 政 治 およびその 哲学 明確

化すること」という職務を果たすために、 社会的に必要とされているのである。(31)

先性は以下のような形で定まってくると言える。

政治哲学は、

この社会的必要性に応えなければならない。

本稿の観点からは、

政治哲学が論じるべき主題

0)

を整

た国家秩序の発見、 第一の優先性を持つ主題は、 およびそれを実現し維持する制度についての考察・考案のための議論である。 問題解決活動 (試行錯誤活動) 般の円滑な遂行を可 能にするための 条件

政治 ラリズム論 具体的 :社会の構成原理として理解し、その構成原理を備えた国家秩序のあり方を探求することを目指す議論として わ ;ゆるリベラリズム論の多くは、このような理想的な国家秩序の発見を目指す議論として捉えられる。 記には、 は、 国家の構成員それぞれが自己の善き生を試行錯誤的に模索していくことを可能にする共通条件を ιį わゆるリベラリズム論や民主主義論、 権力分立制に関する議論などである。

リベ

あ 題である。 ń えて、 様が問題となる。 政府は政治秩序を実現し、 政府 民主主義論や権力分立論などの政府の理想的な制度のあり方を論じる議論も第一の優先順位を持つ主 の形態 誤った政府形態による政治は、 ŧ 少なくとも原理 維持する機能を果たす。 的 V ベ ルでは、 問題解決活動一 理想的な政治秩序を生じさせるためには、 実践的試行錯誤を通じて模索していくことになじまな 般の可能条件を備えた秩序を破壊する恐れ 政府 の形

できる

|解することができる。

また、リベラリズム論の一部としての市場機構論、(33)

人権制度論などもこれに含むことが

問的議論で明

らかにされた原理的

レベ

ル

での

理

想的な国家秩序や政治制度の像は、

民主主義制度を通じ、

名

題 も有する。 では、 政治哲学が明らかにしていく必要のある主題に含まれる。 民 主 痸 か 独裁制 か あるい は権力分立制 を備えた政府 か 集権的 にな政府 かなどの政府 の形 態をめぐる問

することが必要となる 的 6 具体的状況の中でそうした秩序を実現していくためには、 えた国家秩序の た秩序を状況の中で具体的に実現していくためには、 にな価 ń ない。 値論 民主主 これら個別的で複雑 一のみを通じて行うことは不可能である。 あり方は 義論を行う必要性は、 原理的 な諸事情を考慮に入れ、 レベルでは政治哲学の学問 他の角度から論じることも可能である。 したがって、 民主主義制度は不可欠である。 理想的 やはり個別的で複雑な諸事情 **|的議論で明らかにされ** な国家秩序を細部まで明らかにすることを、 実践的試行錯誤の手続を通じて細部を明 問 題解 なけ 問 決 題 が関係してくるのは避 n 解 般 ば 決の一 ならな 0) 可 能 条件 般的条件を備 -を整備 か 学問 17

用い 0) 民主主義論は、 ;の提案とみることも可能である。 た解決の探求を行いうる主題はそれに任せようとする提案、 の事情は、 「再行主義」 民主主義制度の を軸とした根岸教授の民主主義論を参照すれば、 価値を論じたものであるが、 国家に関連する不都合のうち、 またそうした実践的試行錯誤を可能にする制 明瞭に理解可 能である。 実践 的 試 根岸 行 教 度

保障すること」である。 使う機会をもつ人びと(使い手)〈有権者〉 有権者を指定し、 のできる限り大きな部分とした上で、 根 岸教授は、 民主主義を明確に規定してい 彼らの 実践的試行錯誤を制 つまり、 民主主義の制度は、 その使い手の人々に、 の範囲を、 度的に可 る。 それ 能にしたものであると理解することができる。 政府を機能させていく上で、 そのしくみが作用を及ぼす対象としての人びと によれば、 その仕組みを使う上での試行錯誤の機会を最大限 民主主義とは、 「国家 使い手としてなるべく多くの (政府) というしくみを 〈国民〉

秩序 哲学の考察すべき最 で実現するために必要な制度的手段を整えるという観点からも、 うことはできず、 要である。 数 の人々の の 細部を個 民主主義制度が存在しない 口 1 別的状況の中で最善に整えていくことは困難である。 カ つまり ル な知識を反映した実践的試行錯誤を行うことによって、 も重要な主題の一つに含まれると言うことができる。 「再行主義」 的手法をとることはできず、 国家にお いては、 多数者のロ 民主主義制度の価値やあり方については、 問題解決一般の可能条件を備 1 このように理想的 カルな知識 (本号の論文を含む その細部を明確化していくことが必 を利用 国家秩序を現実的 した実践的試 一再行 えた理想的 主義」 行錯 誤 状 政治 況 国 を

・根岸教授の一連の民主主義論は、 この意味で政治哲学の最も中心的な主題を扱ったものだと言える。)

0 政 政策 策 政 水が問題 、治哲学が論じるべき第二の優先性を有する主題の種類として、 7の価値について論じることである。 解 決 般の可能条件を備えた秩序を破壊する恐れを持つとき、 次のことが挙げられよう。 その秩序を擁護するという角 それ ば 度 具体: からそ 的

その政策の有する全般的 学には行 施される個別的状況についての複雑な知識やその政策の及ぼすであろう多様な波及効果を知ることが求めら ることは許されない する政策 Ŀ 政 公治哲学が、 一の議論ではそれらを完全に知ることは不可能であるため、 の批判を行うことは可能である。 V がたい。 具体的個別的な政策の良し悪し自体を論じることは困難である。 ため、 しかし、 一価値を議論する場合よりも、 政治哲学における学問 問題解決のため ある政策 の一般的条件の擁護という角度から、 的 価値 が、 はるかに単純だからである。 問題 論 が必要とされる主題であると考えることができる。 解 決 政策の有する全般的な価 般 0) 可能条件を侵すか否かを指摘 それを行うためには、 また、 その秩序を破壊する恐れを有 値を論じることは政治 それを実践的に吟味 することは 政 策 んる。 が 実 哲

机

)解決活動を可能にする一 例えば、 人権侵害の恐れを有する政策、 般的条件の擁護という角度からであ 民主主義制度や市場経済制度の破壊の危険性をもつ政策に関して、 れば、 政治哲学者は政策 Ó 価 値を有効に論じるこ 間

題

うなもの

かとい

う主題も、

政治哲学として学問的に論じることが社会的に必要とされている主題とは

またある特定の善き生き方を実現するため

の理想的な共同

ま

た

人間

とって善き生とは何

トか、

とができる。 な害悪を未然に防 る限り、 学問 たとえ、 的 **議論を通じて批判することは可能である。** ぐためにこうした議論は必要である。 ある政策が民主的過程を経たものであったとしても、 また、 その後の問題解決活動一般を不可能 その政策がこのような危険 にするよう を有

学の中 ŋ はどのようなものか、 つは、 の主題 以上 学問 ば、 Ó の二つは 訚 的 価 どちらも問題解決活動一 値 の善き生とは何か、 価 値 論 論に 0) Ě 政治哲学者が優先的に論じる社会的必要の認められる主題である。 なじみにく 題の一つだと一 ということに関する議論である。 あるい 17 見思 す 般の可能条件ではなく、 はある特定の善き生き方を実現するために必要とされる理想的 なわち、 われれ るかもしれない \_\_ つは、 具体的な政策の良し悪しについ 個別具体的な状況に大幅に依存する複雑な主 が、 高 い優先性は認めが 他方、 たい ての議論であり、 主題である。 以下の二つ な共同 ĺţ 次 一題であ もう の 二 政 体 つ 治

民主的 枠組 を吟味する最も有効な方法は、 個 値 義の過程から得られるもの以上に妥当な判断を下すことは難し 事 別的 !を議論するよりも、 ·柄を処理することを可能にする。 ⑺汀) 先にも述べたように、 ねの 過程を通じた実践的な試行錯 !な事情を考慮に入れなけ 価 !値およびその整備の手立てに関する議論を優先し、 むしろ個々の政策の実践的試行錯誤を通じた吟味を可 具体的な政策の良し悪しについて議論するためには、 民主主義の制度による実践的試行錯誤を通じてそれを行っていくことであろう。 ればならず、 誤は、 政治学の中で行われる学問的価値論が、 思考実験や議 それゆえ机上の学問 論の みでは決して入手することのできない多様で複 そちらに注力すべきであろう。 61 的 [価値 政治哲学の専門的 論になじみがたい。 能にする枠組 具体的な政策の価 その政策を取り巻く多く 研 究者 み、 具体的 は つ 値につい まり 具体的 な政 民主主義 て民 Ó 政 策 0 雑 主 価 0) 主 値 7  $\sigma$ 価

難

ιj

る方がよい。

これらの主題の解答は、 様々な複雑な状況に依存するものだからである。(%)

理想的な共同体のあり方をめぐる主題は、 同時に多様な人々が様々な試行を行い、 一度に行うことのできる試行が一つに限られるという点で効率が悪い。 加えて、 はるかに効率の良い試行錯誤活動が可能である。 これらは民主主義を通じて実践的な試行錯誤を行うべき主題でもない。 その結果をお互いに学び合うことが可能である。 個々人、 あるいは自発的に集った集団によって、 善き生の実質的内容や特定の善き生の実質的構想に基づく 方、 非政治的な私的な社会においては ゆえに、民主主義に比 私的に試行錯誤され

生の実質的構想に基づく理想的共同体のあり方の利点や欠点を明らかにすることができるはずである。 現することができれば、 組みである国家秩序の像を明らかにし、その秩序の実現に貢献することである。 じて各個人が善き生や善き生の実質的構想に基づく理想的共同体のあり方を模索していくことのできるような枠 政治哲学者に要求されることは、この種の主題に直接的に取り組むことではなく、 はるかに精緻に、 、ージックの述べる「メタ・ユートピアの枠組み」の整備に貢献することである。(3) は 各個人や集団の多様な生き方の実験を通じて、机上の学問的議論よりもはるかに効率よ るかに人間と社会の現実に向き合ったかたちで、 善き生のあり方、 他の言い方をすれば、 むしろ実践的試行錯誤を通 そのような国家秩序を実 あるい は特定の善き ロバー

### Ŧī. 結 語

(政治哲学) 本稿は、 根岸毅教授の述べるところの は、 社会的必要性に十分に応えるためには、どのような主題を優先的に論じるべきであるの 「工学」として政治学を捉えた場合、 政治学における学問 的 な価 値論 ح

民主主義を通じた試行錯

学は、

内容を論じることではなく、

なわち

「場」

のあり様の明確化を行うことのみ可能であり、

そのような主題を模索する試行錯誤活動を行い得る形式である政治的

またそのあり様について優先的

に論じる

いう問題について考察を行ってきた。

制度上の造りとはたらきについて、 ような国家秩序のあり方と、 の考察から、 政治哲学の社会的必要性は、 その国家秩序を実現 思考実験や批判的議論を通じて考察し、 「問題解決活動 ĺ 維持することのできるような装置としての国家 (試行錯誤的活動) 明確化すること」 一般を最大限円滑に行 に求められること (政 得る

が

明らかになった。

生の追及を可能にするという意味での善き共同体とは何かという問題は、 論 するという観点から、 第一 験を通じて実践的に模索していく方がはるかに円滑に探求できる主題である。 き生や特定の善き生を可能にする共同体のあり方に関する問題は、 とされている優先性の高い主題であるとは考えがたい。 論であると言える。 国家秩序を実現し、 他方、 ||や市場機構論、 を制度化した制度 の優先性を有する主題は、 の社会的必要性を念頭に置くと、 個別的な政策の有する価値 および民主主義論や権力分立に関する議論である。 他に優先的に論じられるべき主題は、 維持することのできるような政治制度の考察および設計である。 それを侵害する恐れを有する具体的な政策を批判するというものである。 ―つまり民主主義制度 問題解決活動一 一般に関する問題や、 政治哲学が議論すべき主題の優先性は以下のように論じることができた。 般を可能にする国家秩序の発見および明確化である。 の中で徐々に明らかにしていくことのできる主題であり、 個別的政策に関する問題は、 善き生の内実に関わる問題、 問題解決活動一 私的な社会の中で各個人・各集団の生活 į, わゆる国制 般の可能条件を備えた国 政治哲学が論じることが社会的に必 このような主題に関して、 具体的には、 (constitution) 政治の場面での あるい はある特定の善き [家秩序 リベラリズム に関 やり 政治 を擁 する議 0 実 直

枠組

1 Kluwer Academic Publishers, 1993). versies and Political Decision Making," in Schomeberg (ed), Science, Politics and Morality (Dordrecht: Practical Reason, and Policy Analysis," in Fisher, F. and Forester, J. (eds.), Confronting Values in Policy Analysis: The Politics of Criteria (Newbury Park: Sage Publications, 1987), and Schomberg, R., "Contro-政治哲学と政策学の関連に関する論文としては、例えば以下がある。Anderson, C. H., "Political Philosophy

- $\widehat{2}$ 参照、 根岸毅『政治学と国家』慶應通信、一九九〇年、一一四-一一七頁。
- 3 ことができるであろう。 導し規制する原理の考察をする規範学としての性格と、実証科学としての性格とが併存している」(小澤周三ほか 『現代教育学入門』勁草書房、一九八二年、八頁)。この文言から、教育学は「工学」型の構造をとっていると考える 教育学者の小澤周三は、教育学の性格について以下のように述べる。「教育研究には、あくまでも教育実践を指
- $\widehat{4}$ 参照、 根岸前掲『政治学と国家』、二一四一二一六頁。
- $\widehat{5}$ 参照、 同書、 第四章。
- $\widehat{6}$ 参照、 同書、 一四七一一六一頁。
- $\widehat{7}$ 参照、 根岸毅「政治学とは何か」 根岸毅・ 田中宏・萩原能久・河野武司・向山恭一 『国家の解剖学』日本評論社
- 九九四年、五二一五五頁。 同論文、五三-五四頁。

8

参照、

 $\widehat{9}$ る。 で行われる。 改善するという問題解決の意図を持たないタイプの学問、 した限定はない。(参照、 れた理想状態の実現に「役立つ、役立たない」の意味を持つという点で、 ただ、後者の局面は、事実を扱う研究であるが、 つまり、「工学」における中心的関心は操作可能と思われる説明変数に限定されるが、「理学」ではそう 同論文、五五頁)。その点が、同じ事実を扱ういわゆる科学的研究活動であっても、 取り扱う法則の被説明変数の値の変化が価値 つまり「理学」型の学問における研究と異なるところであ 価値論の局面の価値関心を受け継ぐかたち 論の局面で設定さ

る

「工学」型学問の二つの類型を説明する際に、

問題解決を表現するポパーの図式を援用することは差支えないと考え

- 10 動を行わなければならないということではない。 このような構成は、「工学」の論理的な構成であり、 個々の研究は、 ある一人の研究者が常にこれら双方の局面 価値論の局面で行われてもよいし、 事実分析 に渡って研究活
- 11 根岸前掲『政治学と国家』、一〇〇頁。

で行われてもよい。(参照、

同論文、五五頁)。

 $\widehat{12}$ 主義 redoism」につながる見解である。人々の生活が、物事の改善を目指す絶えざる試行錯誤の繰り返しであると 二〇〇三年、二六頁)。そして、根岸教授は、「進歩」の条件として、選択の「やり直し redoing」の機会の重要性 よりも、「選択の繰り返し」と表現する場合が多い。例えば、近著では次のように記している。「私たちが生きるとい 見る点で、根岸教授とポパーの見方はほぼ同一のものと言うことができると思われる。 を強調する。本号の論文もその一つであるが、根岸教授が最近の論文の中で定式化しその価値を強調している た望ましい方に進み行くこと』、すなわち「進歩」を求める」(根岸毅『原理主義と民主主義』、慶應義塾大学出版会、 K・R・ポパー/森博訳『客観的知識―― 近年の根岸教授は、より平易なわかりやすい言葉を好んでであろうが、個々人の人生を「問題解決の積み重ね 根岸教授の政治学方法論における「問題解決」の概念と、ポパーの用いるそれとは多くの共通性を有すると言 「継続的なラウンドでの選択の繰り返しである。この過程において、私たちは、『物事が次第によい方、 進化論的アプローチ』木鐸社、一九七四年、二七三頁 それゆえ、本稿の以下で、

ま

<u>14</u>  $\widehat{15}$ 生じるとみることができる。少なくとも、 様々な形のものを含む。ある問題を首尾良く解決したが故に、今度は他の問題に取り組むという場合は、 てす問題移行の一つであろう。 参照、 問題解決の図式において、 ポパー前掲書、二八九-二九七頁。 また、ある問題の解決のためのある試みがうまくいかなかった場合でも、 ある問題 Pt からその解決の試みの結果として生じる新たな問題 Pt+1へ その試みは、 問題解決のために適切なものではなかったという知識 この図 、の移行 問題移行 式

ある問題を少なくともある程度満

(参照、

ポパ

**)前掲書、** 

七-三二一頁)。ただ、「工学」型の学問がもたらすことを目指す問題移行とは、

?得ることができ、以前とは異なる状態の下で問題に取り組むことができるからである。

<u>16</u> といえよう。ここで、私はそのような問題移行を念頭に置いている。 る学問として捉えることができるだろう。法律学は(後で見るように政治学もだが)、個々人が社会の中でそれぞれ ために生じてきた学問であると捉えることができよう。 医学、薬学、臨床心理学などは、 社会で様々な問題解決活動を行っていくために必要な基本的能力を子供にどのように身に付けさせるかを考察す 肉体的精神的な健康という、問題解決活動一般を行うための共通条件を整える 教育学は、 読み書きなどの知的能力、 他人と協調する能力な

!のいく程度に解決し、主体が、今度は質的に異なる他の新たな問題へ取り組むことを可能にするようなものである

問題解決活動を円滑に行っていくために必要な政治秩序を整えるための学問であると捉えることができよう。

- <u>17</u> 容上の良し悪しについての判断は期待されないということは言えるのである。 者や歯医者は、 捉えられる領域においてのみ学問的な価値論が社会的に必要とされ、また可能であるということである。 あるということは、 学」である医学や歯科学の中にも、 分類した食品工学の一部の栄養学的側面を、「条件整備型」として見ることは可能であろうし、「条件整備型」の 型」と捉えられる活動がないわけではないし、逆の場合も有り得る。例えば、 れることを求めるものではない。実際、「個別問題解決型」として分類された「工学」の中にも、一部、「条件整備 して受け取ることが適当な分野も一部存在している。 この節で行っている分類は、ある「工学」型の学問の中で行われている活動のすべてがこのように明確に分類 健康状態という試行錯誤の条件に関してのみ権威ある価値判断を期待されるのであり、 本稿の議論の成立を妨げるものではない。本稿で述べたいことは、「条件整備型」 美容整形医学や美容的な観点から行われる矯正歯学などの「個別問題解決型」と しかし、ある学問分野をどちらかに明確に分類しにくい場合が 「個別問題解決型」の「工学」として 身体や歯 の活動として 例えば、
- (18) 参照、『現代政治学事典』おうふう、一九九四年、「価値判断」の項目。
- $\widehat{19}$ 九九一年、二二頁 参照、 A・W・コームズ、A・リチャーズ、F・リチャーズ/大沢博ほか訳 『認識心理学(上)』ブレー
- 20 く否定してしまうこととは別のことである。 ら価値が形式論理的に導出され得ないことは積極的に認める。 ここでの記述から明らかのように、 私は、 (参照、 価値は事実と密接な関係を有していると考えている。 沢田允茂 『認識の風景』岩波書店、 しかし、 そのことは、価値と事実の何らかの関係を全 九七五年、 もちろん事実 第二章三節)。

を付加したり、

逆に挙げられている項目を削除したりしていく。

それゆえ、

専門家のこのような価値論が実践的試行

妥当と思われるものに陶冶していくことのみ行い得るのである。 事実認識も価値認識も確証されることは有り得ない。ただ、絶えざる批判的吟味を通じて誤った認識を排除し、 ということであろう。この懸念は誤った認識論的前提に基づくものである。正しくは、人間の認識能力の限界ゆえに 事実と価値の二元論を主張する人々の懸念の最も大きなものは次の事柄であろう。 事実と価値の関係を認めれば、価値に関しても絶対的に善いとされるものが自ら定まってしまうのではないか つまり、 事実は確証され得るがゆ より

- 試行錯誤的に改善していくことを可能にする社会的な機構であると捉えることができる。 ${f Sec}$   ${f Shearmur}$ ,  ${f J}$ ..  ${f The}$ 市場は、 他者からの強制を最小限にし、個々人が様々なアイデアを実際に試し、 自他の経験から学びつつそれを
- (22) 根岸教授も、「試行錯誤に基づく生活の知恵」の存在ゆえに、学問としての組織だった価値論が必要とされ 問」の条件―」『法学研究』五八巻八号、一九八五年、二七頁(注釈の(4))。本稿の議論は、この部分に大きな示唆 場合があることに言及している。参照、根岸毅「工学に欠けるもの、政治学に欠けるものー を受けている。 Political Thought of Karl Popper (London: Routledge, 1996), pp. 118-119 「問題解決のための学
- plex Phenomena," in Studies in Philosophy, Politics and Economics (London: Routledge & Kegan Paul 「複雑性(complexity)」という用語については、 次の文献を参照のこと。Hayek, F. A., "The Theory of Com-
- (2) ただ、個別問題解決型の「工学」の専門家集団は、 費者)の選択活動の手助けを行うことがある。具体的には、 「工学」における価値 この活動を専門家が行う価値論の一つと見ることができなくはない。しかし、この活動は、次に見る条件整備型の フォーマンス」、「持ち運びやすさ」などの項目を列挙したリストを作り、購入の際の吟味を助けるような場合である。 巻く状況に関する認識の深化を通じて、そのリストの項目の重み付けをしたり、 践的試行錯誤が可能である。個々の人々は、そのリストを参考にするとしても、 :論のような権威を持つものではない。個別問題解決型の「工学」においては、一般の人々の 製品の吟味の手引きに類するものを作成し、一 コンピュータ工学者の集団が、「処理速度」、「コストパ 実践的試行錯誤を通じた自己を取 リストに含まれていない新たな項目 般の人々 実

シュルツ/上田吉一訳

『健康な人格

―人間の可能性の七つのモデル』

川島書店、一九八二年。

が一 誤 の 般に「哲学」と称されるようになるまで、 結果を超えるような権威を持つことはない。 大規模に、 実践的試行錯誤が可能であるがため 精緻に展開される社会的必要性がない Ė 専門家による机 のである。 L 0) 価

25 著名な臨床心理学者の 「精神的健康」に関する考察をまとめたユニークな書物として、 以下の ŧ 0 がある。

 $\hat{2}\hat{6}$ する。 す 行われ、 などの名称は存在しないのであろう。 などが伴わないものも少なくはない。 口 グラムされているため、 いものであるからだろう。 「医学哲学」、「薬学哲学」という名称が しかし、思考実験や概念操作を用いた価値論を「哲学」と称する一般的傾向になじまないため、「医学哲 また、その結果(医者や薬学者の判断) 議論するまでもなく感知することができる。 たいてい、肉体的不健康の状態には、 けれども、 その場合は、 用いられないのは、第一に、 が、 医学や薬学において組織だったかたちで学問の一部として価 医者や薬学者は、 素人の議論よりも何らかの権威を有するものであると社会的に 痛みや不快感などの感覚が伴うよう生物学的 動物実験などの手段を用いて、 ただ、健康に関連する事柄で、 肉体的健康の状態が多く Ó 良し悪しを判断 湯合、 痛みや不快感 か ŋ

ここでは、 問題解決活動 眼の健康状態を、 般 の可 能条件について、 問題解決活動一般の円滑な遂行を可能にする条件の一つとして捉えてい 原理的 レベルと適用レベルとを区別して考えることが求められよう。

受け取られてい

るという点では、

法哲学や教育哲学と変わりない。

すればよいかとい と言える。 それらの条件を実現していく際には、 題解決活動 て問題解決活動一 (がある。 その際に、 学問: また、それが可能である。 般の可能条件は、 的 いう問題 価値 般 実践的な試行錯誤 論 の可能条件が整備された状態を細部まで完全に明確化することは、 たは、 を通じて明らかにされ やはり、 原理的 その状況における実践的な試行錯誤を通じて模索されなけ は原理的 やはり様々な個別的事情を考慮に入れる必要が生じるであろう。 しかし、 レベルでは、ここで述べているように学問的 シャベ た原理 原理的レベルで明らかにされたものをある具体的状況に ルで明らかにされた条件を損なう恐れのあるものであってはなら 的 レベ ルでの条件をある状況下で最適に適用 価値論を通じて明ら 机上の議論では行 ればならないだろう。 するためには ある状況 おいて適 かにされ い得 る必必

この 原 事 理 情 前 は レベ 医学においても同様であろう。 ル で明らかにされたものの範囲内で行われなければならない 医学は、 通常は 健 康 という問題解 決 般 0 可 能 条件 0 整備 担

「工学」として行われる必要があると言える。 備型の「工学」として行われることが必要なのである。これと同様に、政治学も、研究活動の大部分は条件整備型の 題解決型の「工学」として構成しようとしたり、個別問題解決型として多くの研究活動が行われたりするようであ て医学を構成しようとする社会的要請もあると考えることができよう。 別問題解決型の「工学」として理解することが適切である分野も存在する。したがって、 う 「工学」型学問として理解することができる。 社会的には非常に困った事態に陥ることになるのは明らかである。ゆえに、少なくとも医学の大部分は、 しかし、 美容整形医学のように、 しかし、だからといって、 健康とは無関係 個別問題解決型の学問 医学全体を個 の分野、 つまり

- $\widehat{30}$ g., Jacobs, S., Science and British Liberalism: Locke, Bentham, Mill and Popper (Aldershot: Avebury, 1991), p. 211. 私は、ここで述べているような事柄、つまりある誤った試行の帰結として試行錯誤の条件自体を破壊 してしまう危険性の有無ということを考慮に入れれば、この方法論的な二重基準は理解できると考える。 会工学を唱えるぐらいで非常に保守的である。この方法論的な二重基準は矛盾である」とする批判である。 は大胆な推測と反駁という「絶えざる革命」を求める一方で、社会科学方法論においては、 ポパーの方法論に対して寄せられる批判の一つに次のようなものがある。「ポパーは、 自然科学方法論 せいぜい慎重な漸進的 7
- 31 体的な生き方・活動の仕方については判断を下さず、その選択を人々にまかせるところにある」(前掲 うした「場」の一部を形成する国家秩序および制度を描き出す作業だと述べることが可能であろう。 を下す」(同頁)。本稿で論じている政治哲学が扱うべき高い優先性を持つ主題とは、「再行主義」の考えに立ち、 ては、『可能な限り、 民主主義』三三頁)。また同時に再行主義は、「人々が具体的な生き方・活動の仕方の選択を行う『場』 根岸教授の提示する「再行主義」は以下のような特徴を有する。再行主義は、「人びと(個人および集団 強制の要素を排除し、すべての人にやり直しの機会を確保すべし』を内容とする一義的な判断 の作りにつ 『原理主義と
- 32 人は自己の問題解決の試みに関して他の人の自発的協力を得ることができる。それにより、 市場機構は、 拙著『リベラリズムの再生-可謬主義による政治理論-』慶應義塾大学出版会、二〇〇三年、 目的を異にする人々の間の協力を促すはたらきを有する。市場機構の下での交換を通じて、 単独で努力を行うよりも

はるかに効率よく問題解決の試みを行うことができる。

参照、

ハイエク/篠塚慎吾訳『法と立法と自由Ⅱ

(ハイエク

全集九巻)』春秋社、 の条件の不可欠な一部分を構成していると言える。 一九八七年、一五二-一五八頁。 市場機 構の存在 は 問題解決活動一 般を円滑に行って くた

- $\widehat{34}$ 代中国とその世界ーその政治的展開』慶應通信、 「政治における試行錯誤の機会―もう一つの民主主義論」石川 一九八七年、 八〇六頁 忠雄教授還暦記念論文集編集委員会編 現
- 35 害する恐れがあるとき健康を維持するという角度からその生活態度を批判するのであれば専門家として権威ある見解 れる発言にはならないが、ある生活態度がその人の身体的健康 示せるということと同様だと言えよう。 この事情は、 医者が、 他者の健康に関わらない生活態度一般について意見を呈したとしてもなんら権 問題解決活動一般を可能にする条件の一つ――を 威 が ?認めら
- $\widehat{36}$ いわゆる違憲立法審査権の必要性をこの角度から理解することも可能だろう。
- $\widehat{37}$ house, E. J., The Policy-Making Process, 3rd ed. (NJ.: Princeton Hall, 1993), chap. 3 や分析に関して、 ために有効な一種の情報処理の役目を果たすものとして捉え、本稿と類似した観点から、 C・E・リンドブロムとE・J・ウッドハウスは、 学問的・理論的なアプローチよりも優れていると述べている。See Lindblom, 民主的な政治過程を高度の複雑性を持つ社会問題を解 民主的過程は、  $\dot{\Omega}$ F and Wood 政策の評価 する
- $\widehat{38}$ 参照、R・ノージック/島津格訳 『アナーキー・国家・ユートピア(下)』木鐸社、一九九二年、 五〇八頁。
- 三部第一〇章。問題解決活動 ではない。 枠組み」の発想に等しいものであろう。 |制度などが不可欠である。 この部分は、ノージック前掲書の第三部「ユートピア」の議論に大いに示唆を受けている。 問題解決活動 一般の可能条件を整備した国家秩序を実現するためには、 その意味で、 一般の可能条件を整備した国家秩序は、 しかし、 国家の果たすべき役割は、 本稿の議論は、ノージックの最小国家擁護には必ずしも与するも ノージックの言葉で言う「メタ・ユートピアの ノージックの理論以上に大きなものであると考 幾らかの福祉制度や適切な公教育 参照、 同書下巻、 第
- (40) 参照、本稿の註(31)。

える。